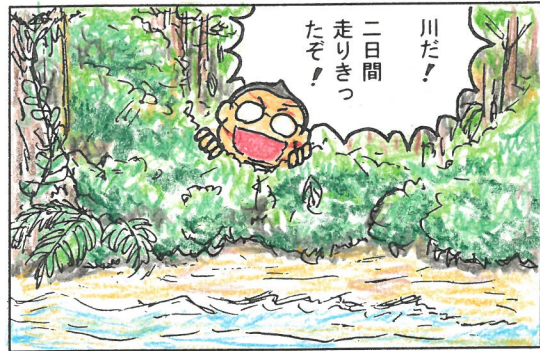
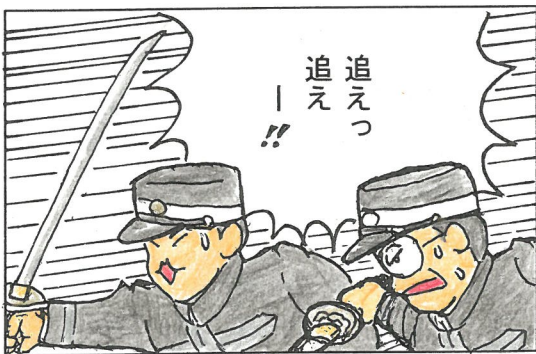


ブルデの
つきがた
グラフィティ



作
SのAた3う

それは、獄舎建設のために先行して送り込まれた 40 名の囚人の中の一人でした。まだ建設途中の明治 14 年 8 月 21 日のこと。朝の点呼で扉を開けた途端に一人の囚人が飛び出し、大雨の中あつという間に森に逃げ込みました。看守達も抜刀し囚人を追いかけますが、おりしもの雨で足跡は消え、見つけることができません。脱走囚は二日間走り続け、3 里 (約 12Km) は逃げたつもりでいたそうです。そして追っ手の気配も無くなった川岸でアイヌ人のたき火跡を見つけ、残り火で火をおこし、キノコでも焼こうとしていたのです。しかし、その場所は石狩川の監獄波止場から上流 5 町 (約 500m) ほどの地点。監獄のすぐ近くだったので立ち上る煙を発見されあえなく捕まります。当時の月形は、まさに原始林の様相、凄まじい大自然の中で方向感覚も奪われ、本人も気がつかないうちに監獄の近くまで戻ってきてしまっていたのです。今回は、いつものメンバーの出演で樺戸集治監の歴史の一端をご紹介します。月形樺戸博物館では、こうした「もうひとつの北海道開拓史」の資料をたくさん展示しています。是非ご来館ください。